

徳富蘇峰と今日のメディア

加 茂 佳 彦

奨励者紹介[かも・よしひこ]

元駐アラブ首長国連邦特命全権大使

同志社大学グローバル・コミュニケーション学部嘱託講師

呼びかけよ、と声は言う。

わたしは言う、何と呼びかけたらよいのか、と。

肉なる者は皆、草に等しい。

永らえても、すべては野の花のようなもの。

草は枯れ、花はしぼむ。

主の風が吹きつけたのだ。

この民は草に等しい。

草は枯れ、花はしぼむが

わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。

(イザヤ書 40章6―8節)

はじめに

本日は伝統あるチャペル・アワーにお招きいただきましたことを誠に光栄に存じます。今回、ご縁を頂戴しまして「徳富蘇峰と今日のメディア」という演題で多少のお話をさせていただくことになりました。チャペル・アワー本来の格調高い講話とは、ほど遠い内容の拙いお話になることを怖れますが、お気軽にお耳を拝借できれば大変ありがたく存じます。

私は40年間外務公務員として過ごし、アラブ首長国連邦の大使を最後に4年前に退官いたしました。私と同志社とは直接の繋がりはありませんでしたが、外務省入省後、同志社大学の姉妹校であるアーモスト大学に2年間ほど留学する機会を得まして、1979年に同大学を卒業いたしました。そのようなご縁があったことや、他にも何やかやありまして、2016年から同志社大学および2017年からは同大学院でも非常勤講師としてお世話になっております。

本日は奨励者としてメディアについて話をさせていただきますが、実は、大学では、日本の外交政策や国際時事問題などを講じておりまして、メディア論につきましては全くの素人でございます。そのような者がメディアを論ずるのは酔狂にすぎられるでしょうが、今回お話しさせていただく内容は、私が日ごろ国際時事問題などを講ずる上で、関心を寄せているテーマでもありますので、勝手ながら、メディアについてのお話をさせていただくことにいたしました。と言いましても、私がメディアについて何か特別の知見を有しているわけではありませんし、これから話す内容に学術的な意味があるわけでもありません。しかしながら、メディアからの情報発信の受け手は一般国民であります。その一般国民の目を通した素人メディア論にも、一寸の魂

が宿ることもあるかもしれないと、多少、開き直りまして、本日は私の問題意識の一端を皆様に共有させていただくことにいたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

メディア論の初歩的分類

さて、素人考えですが、メディアの問題を論ずる場合、情報発信を行うメディア業界に係る問題と、情報受信を行う国民に係る問題の、二つの分野に大別することができるように思われます。メディア業界に係る問題としては、情報入手、情報編集、情報発信の各位相における問題などがあると思われます。情報受信を行う国民側においては、情報選別やその正誤判断、メディアの情報操作への対応、などの問題があると言えるでしょう。

徳富蘇峰

本日の講話におきまして、この諸問題を網羅的に論ずることは私の能力を超えるものでありますし、時間の制約もあって困難です。そこで、本日は戦前戦後の代表的言論人である徳富蘇峰の終戦直後の問題意識を基準として、現代のメディアがそれを克服したか否かについて検討してみたいと思います。皆様ご存知のとおり、徳富蘇峰は、同志社とも浅からぬ縁をもった言論人でした。蘇峰は国粹主義者として知られており、その思想自体は戦後日本の価値観をそのまま代表するものではありませんが、戦前の言論界に卓越した影響力を有した言論人であったことは何人も否定できません。

蘇峰の批判

蘇峰は、終戦後、軍部と日本言論界に対して痛烈な批判を行います。その一は戦時中、軍部が国民に事実を伝えなかったことに対してです。これは真実性を無視した情報操作を行い虚偽のニュースを流していたことに対する批判です。これを言論人の側でも見破ることができなかつたとして、強い自責の念も抱きます。蘇峰の批判その二は、戦中、戦後で日本の言論人・知識人の言動が豹変したことに対してです。占領軍当局への迎合と雷同が、蘇峰にはどうしても許せませんでした。世の空気が一夜にして天皇制賛美から民主制礼賛に変わり、昨日まで鬼畜米英と罵っていた言論人が、いとも簡単に日本古来の伝統である君主制を捨て、民主制賛同者に転向してしまったのです。この豹変に蘇峰は、日本精神の破壊を企てる占領軍の意図を感じ、日本が日本でなくなっていくことに強い危機感を覚えました。同時に権力に阿り、変節した言論界に失望しました。蘇峰の凄さは、それを正直に吐露していることです。

課題は克服されたのか

さて、この蘇峰の批判の矛先となった二つの点ですが、これらは、今日のメディアや情報伝達では克服されているのでしょうか。最初の、真実を報道することは、今日も情報発信側であるメディアの主要課題であり続ています。フェイクニュース（虚偽ニュース）であるか否かの吟味は、情報発信元が多様化する今日にあって、死活的に重要です。情報操作や意図的編集がなされた偏向報道であるか否かの点は、メディアは元より情報受信側である国民側も細心の注意を払って吟味していかなければなりません。当局やメディアは情報を意図的に編集し、自らの主張や立場への共感を得ることを目指すことがあります。そうすると報道の真

実性、公正性、中立性が損なわれてしまいかねません。

もう一つの課題は、メディアの変節、当局や権力への迎合に関するものです。これにつきましても十分に克服されているとは言えないでしょう。即ち、蘇峰の指摘するメディアの課題は未だ克服されておらず、今日的なものだと言えるのです。

最近の注目ニュースと

蘇峰の課題

そこで、蘇峰の課題に照らして、最近話題となったニュースを2、3取り上げてみましょう。私が国際時事問題の講師をしているものですから、どうしても国際問題に目がいてしまうのですが、最近の話題と言えば、なんと言っても日韓関係の悪化です。メディアの注目度も非常に高く、テレビのワイドショーなどでは連日、韓国内政も含めて事細かな報道がなされてきております。新聞や出版でも日韓関係や韓国に関するものが数多く見受けられます。私が蘇峰の課題との関係で選んだ日韓関係の話題は、その一がNHKの「クローズアップ現代+」(2019年9月5日「『表現の不自由展・その後』中止の波紋」)が放映した「あいちトリエンナーレ2019の企画展(表現の不自由展・その後)」についての報道ぶり、その二が週刊ポストの韓国関係記事掲載を巡る作家などの抗議とポスト側の謝罪、その三がチョ・グク氏問題など韓国関係ニュースの過剰提供です。「表現の不自由展・その後」は慰安婦像が展示されており、「クローズアップ現代+」でも慰安婦像の問題を切り口にした報道に力点が置かれていましたので、「日韓関係もの」としてここに取り上げました。

「表現の不自由展・

その後」

その「表現の不自由展・その後」ですが、実際の展示を見た人からは、「反日と反皇室という特定の政治主張に沿う内容となっており、公立の美術館で開催する展示会として相応しくない展示内容であった」という感想が、少なからず寄せられたようです。NHKの番組では、慰安婦像など一部の作品が取り上げられましたが、他の作品についての紹介が十分になされていたとは言えず、同展覧会の性格を浮き彫りにするものではありませんでした。番組では企画展「表現の不自由展・その後」自体の政治的中立性の欠如には触れず、他方で慰安婦像の作者の言い分をそのまま伝え、「公権力による表現の自由への介入が行われた」という主張を伝達することに力点が置かれていました。これを見る限り同番組では事前に意図された特定のメッセージ発出のために恣意的な情報操作が行われた可能性があるように思われます。この例のように、今日でもメディアによる情報操作が行われる可能性はなくなっておりません。情報受信者である我々国民も、知的怠惰に陥ってメディアの伝える情報を、無批判・無点検で鵜呑みにするだけでは、物事の真相が見えてきません。メディアの発信には常に偏向報道のリスクがあることに留意して、できるだけ中立に、かつ、事実関係を正確に把握する努力を行うことが望まれます。

週刊ポストの謝罪

「反日攻勢を強める韓国を厳しく論評した週刊ポストの韓国関連記事は差別的であり、国論を分断するものである」との理由で、同週刊誌に記事を寄稿している作家とジャーナリストや発行元の小学館で本を刊行

したことのある作家などが、週刊ポストの当該記事を強く批判し、抗議したことを覚えていらっしゃる方も多いと思います。そして、この抗議を受け、同紙・同社は直ちに謝罪しました。この一件は、終戦後、蘇峰が感じた言論人の豹変に一脈通じるところがあると私には感じられます。同紙・同社が何故謝罪したのか腑に落ちないところもありますが、やはり、同記事が過度に反韓意識を煽った差別的記事であると著名作家や言論人に批判されたばかりか、同紙・同社との関係断絶まで予告され、その負の影響の大きさを慮ったためなのでしょう。韓国は大統領その人が「盗人猛々しい」との激しい言葉を使って、日本を非難するほどの反日姿勢を露わにしている国であり、その韓国に親しみを感じられない日本国民がいたとしても至極当然ではないかと思うのですが、週刊ポストは、1度はそのような反日姿勢で固まった韓国を批判的に取扱う特集を組み、それを日本人作家から注意されたら、争うでもなく直ちに謝り、幕引きを図ろうとしました。「良識への回帰」なのか「隠れた権力への迎合」なのか。蘇峰ならずとも、この豹変ぶりには当惑してしまいます。

日韓関係ニュースの

垂れ流し

最後に、蘇峰の課題からは情報操作の一類型として理解することができるものかと思いますが、情報の過剰供給についてひと言申しあげます。やはり韓国関係で恰好の例がございます。韓国法相のチョ・グク氏は法相就任前から、連日、テレビのワイドショーが特集を組み、すっかり日本のお茶の間でも馴染みの存在となりました。韓国と言えば日韓関係悪化の渦中にあり、日本製品の不買運動や日本への渡航自粛、さらには日韓青少年交流の中止など、反日行動を繰り返しています。日韓関係悪化は現実にも両国の国民生活にも影響が及んできておりますので、韓国内政に係ることが日本人の関心事であってもそんなに驚くことではないのかもしれませんが。他方、チョ・グク氏を巡る報道は過熱するばかりであり、さすがにこれはやりすぎでしょう。では、日本のメディアは何故韓国絡みのニュースを、均衡を欠くほどに詳しく、熱心に報道するのか。これは韓流ドラマファンやK-POPファンならずとも、関心を抱くところであろうかと思われます。

私は、これを一種の情報操作だと見ています。特定問題について情報を過剰供給することにより、受け手の印象操作を行うわけです。日韓問題について言えば、大量の情報を供給することにより受け手である日本国民に「日韓関係はかくも重要だ」、「韓国との関係を早く元に戻さないと大変だ」という潜在意識を植え付ける効果を狙っているのではないかということです。これは正しく韓国政府の主張と重なります。日本のメディアは、知ってか知らずか、安倍政権ではなく韓国文政権の立場を後押ししていることに留意する必要があります。では何故そうするのか。ざっくり言えば、それがメディア自身の利益につながるからでしょう。さらに言えば、それは日本の政治事情とも密接に絡んでいるためでもあるのでしょう。韓国利権が日本の政治に大きな影響力を及ぼすような政治構造が築かれているせいなのかもしれません。

もう一つ例を挙げれば、ジャニー喜多川さん関連のニュースの大洪水にも同様の手法を感じます。一私人の死去についてすべてのワイドショーが1週間以上、2週間も連日関連番組を組み、放映しました。故人の死を悼むというよりも芸能ビジネスの大きさ、影響力の強さをこの際、視聴者の潜在意識に植え付け、芸能界の振興とテレビ業界の安泰を図るという作意があるのではないかと感じました。

権力としてのメディア

スポーツや芸能を牛耳ることは大衆の心をつかむことに直結します。その大衆は民主主義の世では有権者であり、選挙では政治家が彼らの1票を巡って熾烈な選挙運動を行います。メディアはその大衆の動向を左右することができる影響力があります。議会制民主主義を实践する日本にあって、国権の最高機関は国会ですが、その国会の構成員である国会議員が国民の鼻息を伺い、国民はメディアの匙加減で右にも左にも向く。この影響力を政治も無視できず、メディアに阿る政治家も出てきます。こう考えると現代は、メディアによって我が世の春を謳歌している状況にあると言って過言でないでしょう。もっとも、インターネットの時代となり、ソーシャルメディアの台頭で伝統的なメディアにも新たな競争相手が出てきております。こうした新しい動向はあるにせよ肥大化したメディアには、強い現状維持志向があると思われます。そこに政治とメディアの癒着の動機が生まれてきます。

政治とメディアが癒着したら、戦争中の大本営発表と同じ構図の再来です。東日本大震災の際の福島第一原子力発電所事故を巡っては、報道面でも政府の真実性隠蔽の疑惑が取りざたされました。蘇峰の心配は決して「済み」とはなっていないのです。民主主義の機能不全を防ぐには健全なメディアの役割が必要です。政府の専横を防ぐためには、政府権力に迎合するだけではメディアの使命を果たせないことは言うまでもありません。国民も、一般に、政府べったりの報道では満足せず、どちらかと言えば政府に批判的な報道を好む傾向があると言えるでしょう。しかし、反政府ばかりを強調する言論メディアを盲信することも危険です。メディア側のこのような姿勢は、自らの既得権の擁護のためでもあるからです。思えば蘇峰は、戦後一夜にして自らの伝統や価値観を捨てて時の権力への迎合に走った日本の言論人に憤り、そして彼らを軽蔑しました。戦後日本では、皮肉なことにこの占領軍が残した反日思想こそが民主的で正しいとの思潮が根付き、その下で既得権が形成されてきました。その代表が政府を批判し、大衆に阿ることで自らの権力を拡大してきたメディアではないのか。

メディアの役割は政府を牽制すべきものという、戦後民主主義の時流に乗ったジャーナリズムを展開し、影響力を拡大してきたメディア。民主主義の番人を任じているメディアではありますが、その実態は衆愚政治の番頭に成り下がっているのではないのか。このことを我々国民は、今一度、冷静に点検する必要があると思います。私には、メディアは必要に応じて自らに都合の良い報道を行っては世論誘導を行っているのではないかとすら感じられます。また戦後同様、自らの利益とあらば、その報道姿勢を豹変させることもあるのではないかと危惧する次第です。ここはやはり情報の受け手である国民が、メディアが一方向的に伝える情報の渦に飲み込まれて右往左往するのではなく、メディアに何を望み、何を求めているのかを明確に示すことで、より公正で中立なメディアを育てていくことが大切ではないかと思えます。

蘇峰の気概

徳富蘇峰の思想や信仰については賛同しかねると思う人が多いと思いますが、その気概は現代を生きる我々にも多くの励ましを与えてくれます。新島襄を生涯の師と仰ぎ、多感な青年期に同志社英学校に学び、後年、同志社大学設立の際にも人一倍尽力した蘇峰は、押しも押されぬ、同志社人でした。自らに厳しく、他人にも厳しい蘇峰ですが、新島先生に対する敬愛は、同志社を去ってからも、キリスト者でなくなっても不変でした。自らの思いに忠実であり、それ以外のことには微動だにしない蘇峰。

チャペル・アワーにご参加の学生の皆さんも縁あって同志社に学ばれています。この大先輩、毀誉褒貶はあ

りますが、日本を代表する本物の傑物です。その気概、自らの信念に忠実な姿勢は、後輩の皆さんにも受け継がれるべき同志社の建学精神そのものでしょう。学生の皆さんにはこの気概をもって毎日の大学生活の充実を図られんことを切に願っております。

ご清聴ありがとうございました。

2019年10月2日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録